

ティーチング・ポートフォリオ（教育業績ファイル）

教員氏名	石内 聡明
主な担当科目	室内楽Ⅰ①, 室内楽Ⅰ②, 室内楽Ⅱ①, 室内楽演習Ⅰ, 室内楽演習Ⅱ, 実技個人レッスン[器楽Ⅰ①②③, 器楽実技Ⅰ①②, 器楽実技Ⅱ①②④, 器楽②]
シラバス	ここをクリック（本学WEBシラバス・科目検索ページにリンクします）
2021年の教育目標・授業に臨む姿勢	実技及び演習指導が主であるため私個人的にはその上達に向けて学生個々に見合っ様々な観点から指導し向上させるというのが主たる当然の目的であるが、彼等が将来において社会に対して自らの職種の中で関わって行くためには其れが芸術関連であれ一般業種であれ基本は人格の基礎価値に委ねられることが全てであると考えているので、実技指導や授業などを通じて人としてのあり方や考え方にも多くの場面で触れつつ教育に臨んで参りたいとの想いで続けている。例年通りの姿勢。
2021年の教育に関する自己評価	最終的には学生個人個人の成長の有り様を観て判る事であるが、コロナ禍の中ではできる限りの事を学生に施せたとは思いますが、学生も精いっぱい大学にてすべきことを真摯に全うしたと思う。
2021年のFD活動に関する自己評価	研修会には参加し、内容もしっかりと伺い勉強になった。
授業改善のために取り入れた研修内容	引き続き次年度の課題として認識し授業運営に取り組んでいく。

2021年度(後期・通年)「学生による授業評価アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード：2432 教員名：石内聡明

1) 評価結果に対する所見

先ず大学・短大生の回答が総数の20%という事がとても問題であります。

授業内回答への指導を徹底すべき事、次回への課題としておきたく存じます。

さて幾つかに対する所見を記述いたします。

先ず Q1.2 について、本授業は A・B 同時進行 2 種オケの今年度の年間授業総回数は 52 日/104 回 (月 2・木 1 コマ)、他に特別・集中 2 種練習 23 日(1 日 2.66 コマ換算)、更に本番を 7 公演熟しております。また特に 2~3 公演につきましてはその内容も物理的に流動的とならざるを得ない事から、シラバス内容については基本授業や具体的公演への制作内容等、例年大枠のみを記載するに留めております。毎年この件はオリエンテーション時にその旨伝えてはおりますので {少しそう思う 7~8} と回答した人はその点での理解不足が少しある向きがあります。

Q3 授業回数、時間につきましては予め提示し前記の通り遂行しておりますので問題はありません。

Q4 につきましては降り・乗り番で予め既定されたものですので {余り思わない} 以下の回答は意味にそぐわないものと思います。(或いは出番がもっと欲しいということかもしれませんが、楽器によっては編成上基本的に少ない楽器もあります)

Q7 につきましては実践という事で専門的な内容のコミュニケーションとなりますので当然無駄な言葉は使わず、言葉も適切に選び、時には厳しいものともなるはずです。

Q10 満足度は 92%以上ですので安心しております。

2) 要望への対応・改善方策

履修者が多い / 1 か月に数曲で良い

言葉は異なりますが基本的には自分ももっと深くしっかり時間をかけて学びたいという意識だと思えますし、これは至極当然の在り方だと思えます。但し本授業は基本的に管弦楽を学びたい学生の為に開講されております。現実的に今年度は特に管打楽器では 150 名以上が履修しておりますので全履修者に経験が行き渡るようにオケを A と B に分け、B では電子オルガンと共に管打 (一部弦) でオケの基本から応用を多くの曲から学べるようにし、A ではフルオケで大きな楽曲に深く掘り下げて取り組み、貴重な本番に向けて臨めるよう縷々配慮して授業を組み立てております。更に其々の合奏日には弦管打のオケ専門家である教員が全パートに配置され細かくアドバイスをして頂ける等、これ程までに取り組んでいる大学は他に例を見ないと思えます。

学生の皆さんが個々に深く学ぶことはどの様な環境でも当然の事でありませぬ。特にオケを学ぶ際には各々が専門の先生から事前に具体的に学び、会得することが先ずは何よりも必須の事でしょう。

ご理解を頂ければと思います。

3) 今後の課題

基本的には順当に授業は遂行され、結果も充分引き出せてきていると思いますが、確かに履修者が多いことは認められるところです。前述の通りオケ授業で〈基本から応用、広くそして深く管弦楽を学ぶ〉という目的を踏まえれば、履修者数制限もしくは授業時間増という方向への改革が求められるのかも知れません。

授業で取り上げる楽曲選択につきましては、Harp/Tuba/Percussion/Saxophone/などを含めたものも網羅しつつ行っておりますので古典と近現代が並ぶことも多い為、その都度々々で和声感、音色感、様式を楽曲毎に鮮明にすべく引き続き指導法を組み立てて参ればと思っております。

また本番の有る場合には集中練習から本番指揮者からのご指導がありますが、今年度から指揮科のご協力もあり指揮専門の先生にご指導して頂ける場面もつくることができましたので更に後期も含めそういった先生のご登壇回数を可能な限り増やせればと考えております。

以 上